

\* なお、評者は『図書新聞』2012年9月15日号にも、本書の一般向けの短い書評を寄せた。そこでは本稿では論じなかった二人にとってのエジプトの意味について簡単に示した。

## 文献

Beinin, Joel. 1998. *The Dispersion of Egyptian Jewry: Culture, Politics, and the Formation of a Modern Diaspora*. Berkeley: University of California Press.

長沢栄治 2012 『エジプト革命——アラブ世界変動の行方』 平凡社。

(鶴見 太郎 日本学術振興会海外特別研究員)

鈴木董編『東京大学東洋文化研究所 研究報告 オスマン帝国史の諸相』（東洋文化研究所 叢刊第26輯）山川出版社 2012年 (xii)+458+(v)頁

本書は、オスマン帝国史研究の大家、鈴木董氏とその学恩を受けたオスマン帝国史研究の精鋭を中心とした若手研究者の書き下ろし論文集である。本書刊行の目的は、「序」と「あとがき」における鈴木氏の解説に明記されている。すなわち、鈴木氏を中心におこなわれてきた非公式の読書会、東洋文化研究所における班研究、大学院の演習を通じて、文献・史料講読を続けた結果、オスマン帝国史研究の人材も育成されたことを踏まえ、オスマン帝国史の「研究領域も甚だ多様化しつつ」あるという「実情を紹介」することにある<sup>1)</sup>。なお、鈴木董氏は、2012年3月をもって東京大学東洋文化研究所を退休された。そのため、本書は鈴木氏の退休記念論集にあたるといえよう。

本書は三部構成であり、各部分は研究テーマと時代を考慮した分類となっている。序を除くと17本の論文を含む。以下本書の目次を示しておく。

序 本邦におけるオスマン史研究史私観……………鈴木 董	
第I部 国際関係と交易	
近代オスマン帝国の外交網の拡大過程	
文化世界と近代西欧国際体制系への参入の型についての比較史的一考察	
明治日本と清末中国との対比において……………鈴木 董	
ヴェネツィア人領事が見たエジプトとその周辺	
十六世紀の商業と行政をめぐって……………堀井 優	
オスマン帝国におけるフィレンツェ絹織物および毛織物の販売	
十五世紀末のセリストーリー金箔会社の備忘録から……………鴨野 洋一郎	
穀物問題に見るオスマン朝と地中海世界	
十六世紀後半における物資流通と国際関係……………澤井 一彰	
オスマン帝国の「条約の書」にみる最恵国条項	
十八世紀後半におけるロシアとの条約を事例として……………松井 真子	

1) 本書刊行に先立つ2011年3月、東洋文化研究所の機関誌の一つである『東洋文化』第91号が刊行されている。『東洋文化』中の論文の執筆者（例えば〔鈴木2011〕）は、本書の執筆者の多くと重なる。本書と『東洋文化』とをあわせて参照されたい。

一八〇二年ワラキア・モルドヴァ公宛て勅令の意義について	
オスマン-両公国関係と国際政治への影響	黛 秋津
第II部 前近代のオスマン帝国	
オスマン王統譜における始祖たちの変容	
十六世紀初頭「奇妙な系譜」の成立とその意味	小笠原 弘幸
十八世紀後半オスマン朝の官僚機構における情報共有	
勅令テキストの「通知 (ilmühaber)」についての一考察	高松 洋一
オスマン朝の財政機構	
十六-十七世紀を中心に	清水 保尚
部族から県へ	
オスマン朝アナトリア辺境地域におけるサンジャク形成の一事例	齋藤 久美子
オスマン朝「軍人法官」の実像	
十六世紀中葉以降のカザスケル職「二つの顔」をめぐる	松尾 有里子
第III部 帝国の西洋化改革から国民国家形成へ	
オスマン帝国の制定法裁判所制度	
ウラマーの役割を中心に	秋葉 淳
オスマン帝国の税制近代化と資産税	
十九世紀前半のダマスカスの事例	大河原 知樹
オスマン帝国における「公教育」と非ムスリム	
共学・審議会・視学官	長谷部 圭彦
非ムスリムのオスマン官界への参入	
ハゴブ・グルジギアン (一八〇六-六五) の事例から	上野 雅由樹
トルコ正教会独立運動とトルコ人意識	
『アナトリアにおける正教の声』紙の分析より	石丸 由美
現代トルコの民族主義者行動党 (MHP) とイスラーム	
一九六五-二〇〇七	宮下 (関口) 陽子
あとがき	鈴木 董

多数の論文を含む本書について、この書評では、全論文の要旨をまとめ論じるのではなく、本書の構成、各論文の扱う時代・地域、そして、利用・引用されている史料・研究書の言語を概観しながら批評していくことにしたい。

まず、本書の構成をみると、本編は三部構成である。各論文の内容は各部の見出しに整合するとともに、論文同士が部内のみならず、部の枠を超えてそれぞれ関連し合っているのは見事としか言いようがない。例えば、第一部と第二部の論文は西洋化改革以前の時期を、第三部の論文は西洋化改革以降の時期をそれぞれ扱うが、税制については清水と大河原の両論文を、また、司法については松尾と秋葉の両論文を通読することで、その仕組みと変遷がうかがえる。ところで、各論文の内容をみると、部の見出しにある「国際関係」「交易」「西洋化改革」「国民国家形成」といったテーマ以外に、「統治体制」という括り方も可能であろう (鈴木、堀井、澤井、松井、黛、高松、清水、齋藤、松尾、秋葉、大河原、長谷部、上野の13論文が該当)。特に、第二部は、前近代のオスマン帝国の「統治体制」に関わる論文からなっているといえる。このように「統治体制」に関わる論文

が多い背景として、高度に発達した帝国の文書行政機構が作成した膨大な文書が残存し、それが研究に盛んに利用されているというオスマン帝国史の特色があげられよう。例えば、古文書学およびアーカイブ学的な観点に基づく高松論文は枢機勅令簿に基づき、齋藤論文は16世紀中頃から17世紀後半までのヴァン湖周辺のケサンニー族とケサン県に関わる租税台帳・ディルク発給簿などに基づき、それぞれ緻密な分析をおこなっている。

次に、論文を時代別に分類すると、現代トルコの民族主義者行動党（MHP）における党のイスラームとの関わりを扱った宮下（関口）論文以外は、まさに本書の題名通り、コンスタンティノポリス征服以降の、「帝国」と呼ぶにふさわしい統治体制と地位を獲得した「オスマン帝国」期を扱う。さらに、扱われている時期を大まかに整理すると、15世紀から16世紀初頭までが3本（堀井、鴨野、小笠原）、16世紀後半から17世紀を扱うものが4本（澤井、清水、齋藤、松尾）、18世紀後半を中心にその前後の時期が3本（松井、黛、高松）、19世紀以降から20世紀までを中心とするものが6本（鈴木、秋葉、大河原、長谷部、上田、石丸）となる。ここで注目すべきは、数も種類も少なく、残存するオスマン語史料は既に検討され尽くしたかに思われる、15世紀から16世紀初頭までの時期を扱う論文が3点も含まれている点である。堀井論文はヴェネツィアの文書史料を、鴨野論文はフィレンツェの文書史料をそれぞれ利用することで、オスマン語史料の欠落を補うという、この時期に関するものとしては日本においては稀であるが、ヨーロッパでは古くから行われていた手法を用い、新たな視点を提供する。一方、小笠原論文では、従来ほとんど注目されていなかったオスマン語史書における系譜の記述に着目することで、新たな事実の一端を浮き彫りにした。今後も、新たなオスマン語史料が見出される可能性が皆無というわけではなく、また、考古学などの異なる分野・方法からのアプローチもあろうが<sup>2)</sup>、これらの論文は、史料に制約のある時期のオスマン帝国を分析・考察する際の手掛かりを与えてくれる。

各論文の扱う地理空間についてはどうであろうか。検討対象となる地理空間がある程度設定されているといえる論文は10本ある。その内訳は、地中海世界3本（堀井、鴨野、澤井）、黒海地域2本（松井、黛）、アナトリア及びシリア地域5本（清水、齋藤、大河原、上野、石丸）である。このうち、ワラキア・モルドヴァ（黛）、アラブ系住民の居住地であるシリア（清水、大河原）、そして、アナトリアにおけるクルド系部族地域（齋藤）、アルメニア系住民（上野）、正教徒のトルコ語を母語とするカラマンル（石丸）を扱う各論文は、まさに多民族国家としてのオスマン帝国とその支配体制の多様性を示す。特に、黛、石丸、上野の各論文は、近代をむかえる時期における非ムスリムの活動と、彼らが直面した問題の一端を伝えるユニークな論考である。また、オスマン帝国に関わる周辺諸国・地域としては、イタリア諸都市（堀井、鴨野、澤井）、ロシア（松井、黛）、ムハンマド・アリー・パシャ期のエジプト（大河原）が登場する。これらの論文を読み進めることで、例えば、15世紀から16世紀は、オスマン帝国が地中海世界に進出し、地中海諸国・諸地域との接触が盛んとなるが、18世紀以降には、黒海方面で新たに台頭してきたロシアがオスマン帝国に圧力を強めてくるという流れがみえてくる。また、各論考を読み比べることで、それぞれの時代におけるオスマン帝国の支配体制・対外関係の特徴と、その変遷とを読み取ることも可能である。そのため、本書は専門性の高い本でありながら、一冊で「オスマン帝国」史の大まかな流れを辿ることができるものとなっている。

なお、常駐在外公館制度の拡大とその特色を扱った鈴木論文は、特定の地理的範囲を扱うものではなく、文字通り世界全体を扱うものであり、その広い知識と視野に基づく比較研究の面白さに感

2) 例えば、[Baram, U & L. Carroll (ed.) 2000] を参照。

服した。このようなスケールの大きい論文は、他の分野の研究者にも刺激を与えるものであり、オスマン帝国史研究者の将来の目標ともなるものであろう。その点、澤井論文も、フェルナン・ブローデルが課題として残したままの地中海の小麦問題について、オスマン語史料に基づき、オスマン帝国における穀物問題に関わる地中海規模で結論を下すための手掛かりを提供することを試みたものであり、評者にとって本書中、最も興味深い内容であった。

このように本書は専門性の高い本でありながら、オスマン帝国の多様性とその概要を通観する好著となっている。しかし、不満がないわけではない。特に、和訳と用語の使い方、統計分析などに関わり疑問のある論文もあるが、ここでは本書全体の構成について気になった事を3点だけ指摘することにしたい。第一に、本書では澤井論文以外には、地図が一切示されていない。各論文に登場する重要な地名と地域名を記載した地図が、巻末にほしいところである。第二に、オスマン帝国に関わる専門用語などについては、巻末に用語索引があってもよかつただろう。また、そのためには、第三に、訳語やオスマン語の転写表記についても統一する必要があるのではなかろうか。もちろん、地名と地域名は時期や言語などによって、役職の性質・内容も時期や地域によって異なり、そして、混合言語であるオスマン語の転写にいたってはトルコにおいてさえ統一されていない、といった問題があることは承知している。しかし、今後の課題としてあえて触れておくことにしたい。

最後に、本書に使用されている史料、参照されている研究で使用されている言語に触れてみよう。史料は、オスマン語を中心とした刊行・未刊行の文書史料と、オスマン帝国末期から現在にいたる新聞・雑誌といった定期行物を主軸とし、さらにヴェネツィアやフィレンツェに保管されているオスマン語以外の言語で書かれた様々な史料が利用されている。引用されている研究文献の言語も、西欧、東欧、バルカン、コーカサス、西アジアといった、かつてのオスマン帝国領の、或いは帝国と関わりのあった、国や民族の言語をほとんど網羅せんばかりのものとなっており、さらには中国語までもが含まれている。これらの点からも、読者はまさに、本書の「序」と「あとがき」で鈴木氏が指摘する、日本におけるオスマン史研究の多様化と「研究の間口の広さと奥行き」を実感できるだろう。

## 参考文献

Baram, U & L. Carroll (ed.) 2000. *A Historical Archaeology of the Ottoman Empire: Breaking New Ground*, New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

鈴木董 2011 『東洋文化 特集 オスマン帝国史の諸問題』 91, pp.197-218.

(今野 毅 北海学園大学経済学部 非常勤講師)

---

**Osman, Ghada. 2011. *A Journey in Islamic Thought: The Life of Fathi Osman*. London: I. B. Tauris. xvii+286 pp.**

エジプト最大のイスラーム組織であるムスリム同胞団は、その創設以来、エジプトおよびアラブ世界の最も重要なアクターであり続けてきた。大戦間期から七月革命、1970年代以降のイスラーム復興に至るまで、同胞団の歴史は20世紀のエジプト史と密接に関係しながら展開している。50